

信州大学工学部 学生員 中塚拓郎

信州大学工学部 正員 奥谷 徹

1. まえがき 我々は既に都市内高速道路において、流入ランプでの待ち時間を含む総所要時間を最小化するための流入制御を考案、シミュレーションを実行した結果を発表しているが、¹⁾シミュレーションを実行する上で、発生交通が多い場合に流入ランプ内の密度が飽和交通密度になることがあり、発生した交通がランプ外にはみ出るという不都合が生じ、総所要時間を比較検討する上で支障をきたす場合があった。今回は、このようなことが起らないように制御手法に改良を加え、シミュレーションを実行し、制御効果を検討する。

2. 交通変量の予測と計算

まず、図-1のように交通変量を定める。交通需要量の予測式を

$$\hat{x}_j(t) = \sum_{m=1}^n \hat{\alpha}_j(m) \hat{x}_j^*(t-m) + \hat{\sigma}_j + \varepsilon_j(t) \quad (1)$$

とし、1週間前の交通需要量を用いて重回帰分析を行い、 $\hat{\alpha}_j(m)$, $\hat{\sigma}_j$, $\hat{\varepsilon}_j(t)$ を求める。ランプの交通密度 $\hat{x}_j^*(t)$ は、次式によって求められる。

$$\hat{x}_j(t) = \hat{x}_j^*(t-1) + \frac{q_j}{l_j} \{ \hat{x}_j^*(t-1) - g_j(t-1) \} \quad (2)$$

ここに $g_j(t-1)$ は流入ランプjの、全体時間に対する青信号の割合によって決まる交通容量で、本論文の制御においては、流入ランプの状況に依りて的確な信号間隔による制御を行うので、 $g_j(t-1)$ を流入交通量 $\hat{x}_j^*(t)$ にほぼ等しいものとし、これを用いた。次に、リンク交通量の予測式は、

$$x_j(t) = \sum_{m=1}^n b_j^*(m) g_j(t-m) + \sum_{m=1}^n \hat{\alpha}_j(m) x_j(t-m) + \hat{\sigma}_j + \varepsilon_j(t) \quad (3)$$

式(1)~(3)をリンクj=1,2,...,nについてまとめ、マトリクス表示すると、

$$X(t) = \sum_{m=1}^n A(m) X(t-m) + \sum_{m=1}^n B(m) Y(t-m) + U + \varepsilon(t) \quad (4)$$

ここに、

$$\begin{aligned} X(t) &= \begin{bmatrix} \hat{x}(t) \\ x(t) \end{bmatrix}_{2n}, \quad \hat{x}(t) = [\hat{x}_1^*(t) \hat{x}_2^*(t) \cdots \hat{x}_n^*(t)]^T, \quad x(t) = [x_1(t) x_2(t) \cdots x_n(t)]^T, \quad U = \begin{bmatrix} \hat{\sigma} \\ 0 \end{bmatrix}_{2n}, \quad \varepsilon(t) = \begin{bmatrix} \hat{\varepsilon}(t) \\ \varepsilon(t) \end{bmatrix}_{2n} \\ &= \begin{bmatrix} \hat{\varepsilon}_1(t) \hat{\varepsilon}_2(t) \cdots \hat{\varepsilon}_n(t) \\ \varepsilon_1(t) \varepsilon_2(t) \cdots \varepsilon_n(t) \end{bmatrix}_{2n}, \quad \hat{\sigma} = [\hat{\sigma}_1 \hat{\sigma}_2 \cdots \hat{\sigma}_n]^T, \quad \varepsilon(t) = [\varepsilon_1(t) \varepsilon_2(t) \cdots \varepsilon_n(t)]^T \\ A(m) &= \begin{bmatrix} \hat{\alpha}(m) & 0 \\ 0 & \alpha(m) \end{bmatrix}_{2n}, \quad \hat{\alpha}(m) = \begin{bmatrix} \hat{\alpha}_1(m) & \cdots & \hat{\alpha}_n(m) \\ \vdots & & \vdots \end{bmatrix}_n, \quad \alpha(m) = \begin{bmatrix} \alpha_1(m) & \cdots & \alpha_n(m) \\ \vdots & & \vdots \end{bmatrix}_n \\ &= \begin{bmatrix} \hat{\alpha}_1(m) & \cdots & \hat{\alpha}_n(m) \\ \vdots & & \vdots \end{bmatrix}_n, \quad \alpha_j(m) = \begin{bmatrix} \hat{\alpha}_j(m) & 0 \\ \vdots & 1 \end{bmatrix}_2, \quad \alpha_j(m) = \begin{bmatrix} \hat{\alpha}_j(m) & 0 \\ 0 & 0 \end{bmatrix}_2 \\ Y(t) &= \begin{bmatrix} g_1(t) \\ g_2(t) \\ \vdots \\ g_n(t) \end{bmatrix}_n, \quad B(m) = \begin{bmatrix} \hat{b}(m) \\ b(m) \end{bmatrix}_{2n}, \quad \hat{b}(m) = \begin{bmatrix} \hat{b}_1(m) & \cdots & \hat{b}_n(m) \\ \vdots & & \vdots \end{bmatrix}_n, \quad b(m) = \begin{bmatrix} b_1(m) & \cdots & b_n(m) \\ \vdots & & \vdots \end{bmatrix}_n \\ &= \begin{bmatrix} \hat{b}_1(m) & \cdots & \hat{b}_n(m) \\ \vdots & & \vdots \end{bmatrix}_n, \quad \hat{b}_j(m) = \begin{bmatrix} \beta_1 & \cdots & \beta_n \\ \vdots & & \vdots \end{bmatrix}_n, \quad \beta_j = \begin{bmatrix} 0 \\ \vdots \\ \frac{q_j}{l_j} \end{bmatrix}_2, \quad \hat{b}(m) = \begin{bmatrix} 0 \\ \vdots \\ \frac{q_j}{l_j} \end{bmatrix}_2 \end{aligned} \quad (5)$$

いま、

$$Z(t) = \sum_{i=1}^{M-1} A(\hat{a}+i) X(t-i) + \sum_{i=1}^{M-1} B(\hat{a}+i) Y(t-i) \quad (6)$$

と置き、 $Z_0(t) = X(t)$ とすると

$$Z_t = \Phi Z_{t-1} + \Gamma Y_{t-1} + V_t$$

(7)

$$X(t) = H Z_t$$

(8)

ここに

$$\begin{aligned} \Phi &= \begin{bmatrix} A(1) & I & 0 & \cdots & 0 \\ A(2) & 0 & I & \cdots & 0 \\ \vdots & \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ A(M-1) & 0 & 0 & \cdots & I \\ A(M) & 0 & 0 & \cdots & 0 \end{bmatrix}_{2nM}, \quad Z_t = \begin{bmatrix} Z_0(t) \\ Z_1(t) \\ \vdots \\ Z_{M-1}(t) \end{bmatrix}_{2nM}, \quad \Gamma = \begin{bmatrix} B(1) \\ B(2) \\ \vdots \\ B(M-1) \\ B(M) \end{bmatrix}_{2nM}, \quad V_t = \begin{bmatrix} U + \varepsilon(t) \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{bmatrix}_{2nM}, \quad Y_t = Y(t) \\ H &= [I \ 0 \ 0 \ \cdots \ 0]_{2nM} \end{aligned} \quad (9)$$

3. 総所要時間の最小化と計算手順 目的関数を J_T とし $t=1 \sim T$ までの総所要時間 E とすることにし、走行時間関数を $C_j(x)$ とすると、

$$J_T = \sum_{t=1}^T \sum_{j=1}^n \{ X_j(t) C_j(X_j(t)) + \tilde{X}_j^*(t) Q_j \} \Delta t \quad (10)$$

となり、この J_T を最小にする $Y(t)$ を求めればよいことがわかる。ここで $X_j^0(t)$ を 1 週間前のリニク j の時刻 t における交通量とし、 $C_j(X_j(t))$ を Taylor 展開して 2 次以上の項を無視すると、

$$J_T' = \sum_{t=1}^T \psi(t) Z_t \quad (11)$$

ここに、

$$\psi(t) = [L_1 \dots L_n \alpha_1(t) \dots \alpha_n(t) 0 \dots 0], \alpha_j(t) = C_j(X_j^0(t)) + X_j^0(t) C_j'(X_j^0(t)), L_j = [0, Q_j] \quad (12)$$

次に、式(11)の J_T' を最小化するために、制御変数である交通容量 $y_j(t)$ の制約条件について考える。まず、ランマ j の時刻 t における交通密度 $\tilde{X}_j^*(t)$ は(2)式で表される。

$$\tilde{X}_j^*(t) = \tilde{X}_j^*(t-1) + \frac{\Delta t}{Q_j} \{ \tilde{X}_j^*(t-1) - y_j(t-1) \} \quad (2)$$

ここで $\tilde{X}_j^*(t)$ の制約条件は、 P_j を飽和交通密度とすると

$$0 \leq \tilde{X}_j^*(t) \leq P_j \quad (13)$$

また、ランマ j の固有の制約条件は、上下限値をそれぞれ D_j, E_j とすると、

$$E_j \leq y_j(t-1) \leq D_j \quad (14)$$

(2), (13), (14) 式より、ランマ j の時刻 $t-1$ における交通容量 $y_j(t-1)$ の制約条件は次のように定まる。

$$\max \left[\frac{Q_j}{\Delta t} \{ \tilde{X}_j^*(t-1) - P_j \} + \tilde{X}_j^*(t-1), E_j \right] \leq y_j(t-1) \leq \min \left[\frac{Q_j}{\Delta t} P_j(t-1) + \tilde{X}_j^*(t-1), D_j \right] \quad (15)$$

上式において、 $y_j(t-1)$ の上下限値がそれぞれ 2 つあるので、初期条件 D_j, E_j とし、予備的シミュレーションを行いながら、 $y_j(t-1)$ の最適値 $y_j^*(t-1)$ を逐次求めてゆき、その結果得られた $\tilde{X}_j^*(t-1), y_j^*(t-1)$ を(15)式に代入して $y_j(t-1)$ の上下限値を決定し、これを用いて再度シミュレーションを繰り返し実行し、(15)式の上下限値がそれぞれ 2 つのうちのどちらかに収束するまで続け、最終的に収束した方の上下限値(上限値では $\frac{Q_j}{\Delta t} P_j(t-1) + \tilde{X}_j^*(t-1)$ か D_j のうちのどちらか)をも、本番の制御にあたる。ところで、予備的なシミュレーションを行う時に必要な交通量のデータとしては、

i) 1 週間前の交通量のデータを用いる。

ii) 当日の初期条件により、予備式を使い、あらかじめ 1 日分のデータを求めておき、これを用いる。
 などが考えられる。以上の方法により(15)式に(1)式を代入し、逐次最小化していき、一般に、 n 回で収束した時の最適解 $\tilde{Y}_{t-1}^*$ は次式で表される。

$$\tilde{Y}_{t-1}^* = \Omega_k(t-1) \cdot Z_{t-1} + d_k(t-1) \quad (16)$$

(16) 式の中の k は、予備的なシミュレーションにおいて上下限が n 回目の収束計算(シミュレーション)で収束したことを表す。ここに、

$$\Omega_k(t-1) = \begin{bmatrix} \omega_k^1 & & & \\ & \omega_k^2 & & \\ & & \ddots & \\ & & & \omega_k^n \end{bmatrix} \quad \text{ただし } \omega_k^j = \left[\frac{\tilde{X}_j^*}{\Delta t} \quad \tilde{X}_j^* \cdot \frac{Q_j}{\Delta t} \right] \text{ であり、} \quad d_k(t-1) = \begin{bmatrix} \tilde{X}_1^* \\ \tilde{X}_2^* \\ \vdots \\ \tilde{X}_n^* \end{bmatrix} \quad (17)$$

(17) 中の $\tilde{X}_j^*$ は、予備的なシミュレーションの決定されるパラメータで 0 または 1 をとる。ただし

$$\begin{cases} \tilde{\Psi}(t) = \Psi(t+1) \Phi + \Psi(t+1) \Gamma \Omega_k(t) + \Psi(t) \\ \tilde{\Theta}(t) = \Psi(t) \Gamma \\ \tilde{\Psi}(n) = \Psi(n) \end{cases}$$

以上の理論を用いて制御を行なった場合と行わない場合のシミュレーションを実行し、制御の効果を確認する。具体的なシミュレーション方法等については当日発表するものとする。

参考文献 1) 奥谷 / 須中; 「都市高速道路における統計的制御の効果」土木学会中部研究発表会講演要旨集(1984)